

「村民との対話」G班のまとめ 報告者 菅野千恵子さん、伊藤美智子さん

参加者は予想より多い十数名でしたが、報告者が女性の所為か男性参加者は僅かでした。始めに、原発事故後の生活について、それぞれに感想を含めて語っていただきました。

菅野千恵子さんは、「事故前は、自分たち夫婦と、義父、息子夫婦と孫達の4世代家族で生活していたが、事故後は若い世代と別世帯になり、街中の借り上げ住宅に住むようになった。生活の激変に慣れず、あてもなく、村に通った。辛く、切ない気持ちを、孫にぶつけてしまった。子や孫達が、故郷を忘れて欲しくない。今は、自分たちにできることを前向きに、取り組んでゆこうと思っているが、まだ、自宅に住む決心はつかないし、飯館で採れたものを食する気にもなれない。」と。

一方、伊藤美智子さんは、「事故前は、夫婦と娘の3人で暮らしており、農業と金型を作る工場を、夫婦で協力してやっていた。自分は中学を出ると直ぐに、上京し、働きながら定時制高校を卒業し、21歳で戻って、結婚し、600頭の養豚に、野菜の出荷や、3人の子育てに加え、姑の介護など、苦労を重ねて、やっと家のローンも終わった時に被災した。放射能の危険性も聞いたが、夫婦とも避難は考えず、仮設住宅に住んでいることにして、実質上は、飯館に住んでいる。近辺で採れた山菜も食し、好きなように過ごしている。この間に夫が病気で亡くなったので、福島復興の役に立ちたいとの夫の思いを少しでも実現したいと思っている。自分は、家もあるし、命に別状は無かったので、津波で家族を亡くしたり、家を失った人たちが悲慘だと思って、援助物資を送ったりしている。」と。

お二人の、現在の生き方の違いは、放射能に対する感受性の違いのようにも、思われますが、避難を再優先に考えないといけなかった若い孫たちの存在の有無による違いとも言えると思います。

一軒一軒が遠く離れている飯館村での住み慣れた環境から、狭く、隣同士がベニヤ板一枚の仮設住宅に住まざるを得ないお年寄りたちの厳しい状況や、東電より生活費をもらっていることに対する世間のやっかみや、放射能に対する無知からくる差別などへの憤りが語られました。

以上、震災後に体験した様々な困難の中、お二人が感じた思いを、できるだけ多く語っていただくことに終始した時間でした。復帰したとしても、先の生活が見えない厳しい現実を前にして、「ふくしま再生の会」に協力して、飯館村復興を目指すという、お二人の前向きな、強い熱意を感じた報告会であったと思います。

文責 森本晶子